

第二弾!!

人形を生かす装束



▲劉備の長着

▲孫策の戦袍

川本喜八郎は、人形の装束にも力を注ぎました。装束は当時の時代背景やその人物を取り巻く環境を伝えます。かしら(顔)は喜怒哀楽を表現し、装束は時に鎧を、時に平服をまとい、荒々しい時代や穏やかな時間を感じさせます。人形劇で使われる人形は、装束によって、齢や立場を変え、その人の人生を演じていくのです。

また、人形劇の人形の装束は激しい所作に耐えられるよう、丈夫さと柔軟性も必要です。美しく作り込まれた装束にも、その工夫が随所に見られます。そして川本のイメージを具現化するために、専門技術を持つ多くのスタッフが想いを支え、装束は作られていきました。

監修者コラム“暫存落穂”

諸葛亮の南征(『三国志演義』第87~91回)に登場する南蛮王孟獲は特異なキャラクターです。鼻っ柱が強く、「七縦七擒」(七たび縦ち七たび擒える)というエピソードでも有名です。今回、川本先生の孟獲の人形を渋谷で初めて展示するのはこびとなり、喜ばしい限りです。さて、饅頭の由来が、宋の高承『事物起原』に載っています。『演義』第91回にもほぼ同じ内容で、南征の際に荒ぶる瀘水の神を鎮めるのに49の人頭が要ると聞いた諸葛亮が、無益な犠牲を避けようと、小麦粉で羊や豚の肉をくるんだ「饅頭」を考案し、河中に投げ入れたとあります。ちなみに現代中国語ではマントウと発音しますが、いわゆる蒸しパンのことで、今なお中国北方では主食です。これに対して具入りのものがパオツ(包子)で、これが日本の中華まんに当たります。ちなみに和菓子の饅頭は、14世紀に大陸からもたらされたものだとか(『広辞苑』)。

解説・監修:平井 徹(慶応義塾大学講師)

三国志

関羽の千里行



『三国志演義』第27回から28回にかけて、関羽の「千里を単騎で走り、五関に六将を斬る」颯爽たるエピソードが描かれている。曹操に反旗を翻した劉備だったが、あえなく一敗地にまみれ、関羽・張飛二人の義弟と生き別れとなった。劉備の二人の夫人を守っていた関羽は心ならずも曹操に降伏し、その武勇を愛する曹操によって破格の厚遇を受けた。やっとのことで兄劉備の居所をつかんだ関羽は、曹操からの恩義を返したうえで、決死の「千里行」に旅立つ。途中、度重なる妨害を乗り越え、曹操配下の諸将や、彼を裏切り者と誤解した張飛と果敢な一騎打ちを演じたすえ、ついに古城で劉備と再会を果たす。三兄弟は新たな出発を期し、物語は新たなステージへと進んでいく。

荊州の群雄たち



『三国志演義』の物語中盤戦は、古来「荊州」と呼ばれる戦略的要地をめぐる抗争が焦点となる。現在の河南省南部から湖北・湖南両省、広東省北部までを縦貫する広大なエリアで、中国一の大河長江中流域に広がる沃野でもある。後漢末の時代、この地の刺史(地方長官)として赴任した劉表の治世下で、この地にはつかの間の平和がおとずれ、北の中原(黄河中流域)から戦乱を避けた人々が集い、多くの人材を輩出した。その中の一人が若き諸葛亮(孔明)だった。折から、定まった領土を持たない劉備が、同族の好で劉表のもとに身を寄せており、世に埋もれて才能を発揮できず、いわゆる「髀肉の嘆」をかこっていた。この荊州の地で、劉備と孔明との運命的な出会い「三顧の礼」が刻々と近づいていた。

平家物語

源平、対なる運命



人形というものが、本質的に人物の典型を表現する場合、魔力ともいえるような力を発揮することは三国志で証明されていました。次には「新・平家物語」で人形の本質をさぐってみたい、というのが私の夢でした。平家物語はひたむきで憐れな日本人の典型の宝庫です。ですからそれは、人形のために用意された物語である、と私には思えるのです。写真集「新・平家物語 人形絵巻」より 川本喜八郎 今回の展示では、平氏・源氏、それぞれの近い境遇の人物を対称に配置いたしました。境遇を活かした人物、或いははずかにその境遇を受け入れた人物。平家物語では総計400体を超える人形が作られ演じられました。

